



おちほ

第73号 平成24年6月20日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 太田 正 則
TEL 0748-77-2299 FAX 0748-77-5588 <http://ochiho.noor.jp/>

今年は海賊ですか、さあ、氏神祭のはじまりだぁ～!!



今年も天気にも恵まれ、(後半は雨が降ってしまいましたが) 昨年は実施できなかった三施設合同での氏神祭を行うことができました。今年の落穂寮の作品は漫画やアニメで人気のあるワンピースのキャラクター、ルフィ、チョッパー、海賊船のゴイングメリー号の3つを造らせて頂きました。

なかでもゴイングメリー号は全長5メートルは越えるであろう大きさを造るのに大変苦労しました。なのでそれを運ぶ利用者の方たちも苦労されている様子で、みんな「ワッショイ、ワッショイ」と大きなかけ声をあげ、額から汗をにじませて運ばれていました。東寺グラウンドに着いた後はみんなで記念撮影をした後、ジュースをおいしそうに飲まれる姿がよく見られました。その後は雨が降ってきてバタバタとしてしまいましたが、利用者の方たちは楽しまれていた様子で、みなさん良い表情をされていました。来年は良い天気でありませうように。

二代の齋藤寮長

理事長 山下陽一

弔花(ちようか)先生ご親族の来訪

『糸賀一雄著作集』のなかに近江学園の創設と椎の木会の発足について触れている中で次のように記されています。

落穂寮の開寮式を終えたその足で、私は、学園の昔の医局の隣りにあった四畳半に寝ている弔花老を見舞った。

「おいさん、いま開寮式が無事終わりましたよ。今日からおいさん、寮長ですね」

という、老は枯木のような腕をのばして私にその手を托した。そして喉をくぐくぐ動かしただけで、もう声もでなかった。閉じた目から涙があふれて、それがツーンと眼尻の皺をつたい、とめどなく流れ出ては枕にしみるのであった。枕もとにいたちか夫人は、これもまた目をおさえて「オー、オー」というだけであった。やがてして夫人は、

「おいちゃん、うれしいのよせ。ありがと、ありがと」

と、私に手を合わされた。…
『著作集1』p70

ところで、本年五月十日、弔花先生(以下「弔花」とします)の孫、ひ孫に当たるという方々の来訪を受けました。歴代のご家族についていろいろ調べてこられた

ようですが、弔花の記した原稿、写真などに興味をもたれたようでしたし、私は弔花の若い時代を垣間見ることができました。

落穂寮も創立六十二周年を迎えましたが、落穂寮の創設期に寮長を務めたこの二人の先達については詳しく伝えられてないところがあり、引き継いだ者として承知している範囲のことを伝えておく必要を感じました。

弔花翁

弔花は、齋藤謙蔵のペンネームなのですが、現在では忘れ去られているものの、明治・大正時代の現役で活躍していたころは文芸界に広く知られたひとでした。

神戸新聞・デイリースポーツ社報

一九七二年(昭和四七年)六月二十五日の『忘れ得ぬ人々』欄に取材記事が掲載されていますがそれによると、一八七七年(明治十年)高槻市の生まれ、遊学して国木田独歩と親交を結び、神戸新聞、東京日日新聞の記者などを経て、著述家として活躍していました。この記事によると、明治時代のなかごろ詩人・小説家の国木田独歩の知遇を得ていた弔花は徳富蘇峰などに文芸・随筆家として高く評価されていました。神戸新聞の主筆をしていた独歩の弟・収二の招きにより同新聞社に入社し、日露戦争について軍事小説の著述者を感じさせました。

落穂寮のグラウンドの東角に二つの石碑が建っていますが、左側の石碑は小杉放庵(ほうあん)の筆になるもので、歌が二つ刻まれています。

百人の精薄の地らと遊びつづ

弔花おきなほここに終れり
青空のひとつ雲見て子どもらは
わがちいさまのくも行くという

弔花翁の歌 友人 放庵

小杉放庵(一八八一〜一九六四)は、画家、随筆家であり、芸術院会員でした。独歩の出版社で挿絵を描いておりそのつながりで弔花を知ることとなったようです。この歌碑は一九五九年(昭和三四四年)椎の木会有志によって石山南郷にあった落穂寮敷地内に建てられ、石部移転以降しばらく大津市膳所駅の山手の岡、キリスト教膳所教会岡山霊園にありましたが、二〇〇六年現在地に移設しました。

伝道活動の中路ちか子姉

落穂寮長に就任した弔花は、寮長就任三日後に不帰の人となりました。その後落穂寮長に就任したのは、弔花夫人齋藤ちか先生です。旧姓は中路ちか子(以下「中路」とします)、一八八八年(明治二十一年)生まれ。私は個人的には中路の伝道活動に興味をそそられます。

明治の時代を迎えて福沢諭吉は「新女大学」を著し新しい時代の女性の位置づけを説いたものの、世間ではなお「子にあっては親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」といった封建家族観が色濃い社会でした。その理不尽な世を啓蒙するためにもあり、大正時代の

初期、キリスト教の宣教師たちは庶民の中の特に女性たちに各地域の特性にそって伝道を拡げるのですが、女性たちには女性の仲介者が求められ、宣教師たちのもとで働く若い女性の養成を行いました。

キリスト教バプテスト派は各地に女子神学校を設立しました。中路が学んだ大阪バプテスト女子神学校は、ミス・ラヴィニア・ミード宣教師によって創設されたもので、その初期(第一期?)に卒業しました。卒業後この神学校に併設されたミード社会館(大阪市十三に現存)のスタッフとして貧困地区の隣保事業、託児所など貧しい人たちの生活上と女性たちの自立に向けて活躍していました。

一九一〇年代後半アメリカ・バプテスト婦人伝道会社(ママ)の大会に日本婦人代表として参加し後約三年間にわたるニューヨーク神学校、ミネアポリス神学校に学び、講演活動を行っています。

日本バプテスト派の研究(関東学院大学論集「キリスト教と文化」5号 原真由美)の中に中路の名を見ることができず。一九二〇年(大正九年)、中路は関西バプテスト婦人大会設立の委員に指名されたり、東京バプテスト聯合婦人会との統合のために活発な交流をはかり、キリスト教地域婦人会の組織化や聖書研究の講演を行っています。

中路は英語に堪能で国際感覚豊かな才知あふれる快活な人だったのでしょう。いわゆる大正デモクラシーの真っ只中、封建的家族制度のなか女性が自覚的に発言できなかつた風土にあつて、中路は新しい婦人のあり方を常に懐に秘めその自立を訴える先頭にあつた女性活動家だったといえるでしょう。

(二〇二二・五二五)

それぞれの社会参加

施設長 太田 正 則

新年度が始まりました。これまでにない大災害から一年が経ちましたが、その間にも続く余震、大雨による洪水や土砂崩れ、台風による被害が続き、五月には竜巻による被害がありました。「おちほ」の原稿を書くたびに自然災害に関することに触れていると、多くの利用者の命を預かる立場として、「想定外」を想定する危機管理意識と備えが必要だとあらためて思いました。被災されました多くの皆様には、お見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

さて、障がい者自立支援法を廃止し、新たに障がい者総合福祉法（仮称）施行に向けてその内容が検討され、骨格提言が出されましたが、ふたを開けてみればそのほとんどが反映されていない、事実上障がい者自立支援法の改定ですまされたものとなり、障がい者総合支援法（仮称）として施行されることになりそうです。前号で触れましたが、落穂察にとつての自立支援法は悪法とは言えず、逆にそれまでの措置費制度や支援費

制度と比べ、一人一人の生活支援に必要な給付制度という適切な考え方の法律でした。しかし、一口に障がい者といっても障がいの種別やそれに伴う必要な生活支援の内容、住環境や利用可能な社会福祉資源の割合などによって一人一人が安心して生活するための要望は多岐にわたります。さらに、支援が必要となる原因の違う三障がい（身体障がい、知的障がい、精神障がい）を、一つの法律で網羅しようとするなら、それぞれの原因から想像できる生活不安すべてに対応したものでなくてはなりません。誰もが自分の住みたいところで安心して暮らせることを保障するというのがあれば、財源中心ではなく、人を中心に考えてもらえないかと思えます。そういう点では、自立支援法を廃止し、あらたな法律を前述の視点に基づいて作っていただく必要があると思えます。ただ、私たちもまた、お互いの主張を繰り返すだけでなく、今以上に積極的な取り組みが出来ないか、事業所として研鑽するべきではないでしょうか。

当寮は、これまで児童施設として、将来の社会参加に向けて直接本人に訓練・指導を行ってきました。その方たちも現在の平均年齢は三十七歳になります。本人へのアプローチをやめることはありませんが、訓練・指導というものはありません。今ある力を十分に使っていただきながら、必要なところを支援させていただいていきます。そこで、今、利用者一人一人の気持ちに寄り添った支援ができる環境がわずかでも整ったのであれば、その一人一人の顔を地域の皆様を知っていただけるような活動をしていきたいと、それがこれからの当寮の積極的な取り組みにつながると考えています。入所施設から地域社会に出るのが難しいのであれば、ここに居ながら社会参加できる機会を増やしていく。たまの行事ではなく日常の活動を通して。そんなことを考えています。

これまで利用者さんを「重い障がいを持つ方」と伝えてきましたが、なかなか想像しにくいかと思えますので、まずは利用者さんの雰囲気を感じていただけたいと思います。少し紹介します。日中は五十一名（男性三十一名、女性二十名）の方が活動され、夜間は五十名（男性三十名、女性二十名）の方が利用されています。全く言葉を持たない方や自分のして欲しいことを言葉で伝えることに多くの支援が必要な方が四十二人おられ、会話として成立する方は五人ほどおられます。コミュニケーションを図ることに篤い支援を必要とするため、わたしたちは利用者さんの要望を知るところから半ば手探り状態で取り組まなければなりません。寝食を共にしながら一年ぐらい一緒に暮らしていると大体のことは解るようになってきます。しかし、私自身二十六年間一緒に暮らしてきたこと、その内容の濃さから、これまでの人生で一番長く付き合ってきた方々ですが、日々の直接支援に携わらないようになると「今」の彼らを知っているのは担当職員となりま

昭和54年3月17日生。清松 拓郎。33歳。
趣味は、ガンダムのプラモデルを一生懸命作る事です。オタクです。介護の世界へは、大好きな祖父の認知症をきっかけに関心をもつようになり、そこで自閉症の方や知的障害の方々と出会い、縁があり落穂寮の方で働かせて頂ける事になりました。

心構えとして何事にも一つ間を置き、冷静に対応できるように心がけていく事です。

自分は接客業で人と接する仕事につくことが多く、複数のお客様に声をかけられたりと動揺する場面が多々ありましたので、何事にも一つ間を置き、冷静に対応、判断できる、安心して頂ける職員でありたいと思います。二か月働かせていただいておりますが、まだまだ周りのスタッフにご迷惑をかける毎日です。これからがんばりたいと思います。

▼真由美さんと清松 st



はじめまして。四月から女子棟で働く事になりました。倉橋 朋子と申します。自宅は、皆さんが歩行訓練している農道から見える所で、小三の息子と二人暮らしです。ですから、日頃皆さんが歩いておられるのを、以前から見えていました。外側から皆さんを見ていた時は、普通に散歩をしておられるんだなあ〜と思っていました。が、内に入ってみて、自分の体力の無さをつくづく痛感しております。私は今まで、いろいろな職種を経験してきましたが、三年ほど前に、近江学園内にあります、糸賀一雄記念財団で糸賀先生の残された資料や写真をPCに取り込む作業をする仕事に携わった事で糸賀先生の素晴らしさや功績を知り、障害を持つ方々の、可愛らしさや個性溢れる素晴らしさを知りました。



▲悠子さんと河野 st



▲倉橋 st とすみ子さん

初めまして、この春より落穂寮の女子棟で働かせて頂く事になりました。河野 由美と申します。私には、障がい者の兄が居ましたが、私が小学校六年生の時に他界しました。だから、学生の時から福祉には関心が有り、ボランティア活動等もしていました。でも、福祉の仕事に就く機会が無く、時が経ち、気がつくとも五十歳を越えてしまいました。子どもたちも巣立ち、やっと、学生の頃からの関心があった福祉に関わる事が出来ました。

一年間「介護プログラム」というシステムを通して、ヘルパーの勉強をしながら、落穂寮の利用者さん達の支援をさせて頂く事になりました。

まだ二か月余りしか働いていませんが、生活支援員として、利用者さん達に信頼して頂ける様にならばいいなと思います。若い先輩の皆さん、何の経験も知識も無い私ですが、よろしくお願い致します。

明るく、笑顔忘れず、落穂寮の利用者さん達と楽しく過ごして行きたいと思っています。

平成24年度職員ニューフェイス

はじめまして。今年の四月から落穂寮で働かせて頂いている松宮 舞です。

私は、平安女学院大学の生活福祉学科を卒業し、在学中は介護を中心に学んでいましたが、障がいのことについても少しだけ学ぶ機会がありました。大学の実習では、高齢者施設や知的障がい者の作業所などを経験しました。実習に行く前までは障がい者は怖いという抵抗感が実際ありました。しかし、短期間でしたがコミュニケーションも自然と取れるようになり、一緒に過ごせる時間が楽しいと思えるようになりました。

落穂寮で働き始めてまだ二か月しか経っていませんが、利用者さんの名前や特徴、仕事の内容や一日の流れが少しずつですが分かるようになってきました。利用者さんと関わる中で、楽しいことや戸惑ったこともたくさんありますが、同じ目線に立てる生活支援員になれるようにこれからも一生懸命頑張っていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

▼孝司さんと鳥居 st



本年度四月から落穂寮(男子棟)で働かせて頂いている鳥居 奈美です。

プライベートでは、二男三女(16歳、4歳)のお母さんで、男子棟に負けないくらい賑やかな家庭で日々楽しく暮らしています。

私は以前も障がい者施設で仕事をさせて頂いていたのですが、何も資格を持っていなかったため、そこらでは、利用者さんと関わる範囲が限られており、もっと利用者さんと関わるお仕事をしたいかったので資格を取り、落穂寮で働かせて頂ける事になりました。

まだ、二か月ですが、利用者さんと関わり合え、楽しくお仕事をさせて頂いています。利用者さんスタッフの方にご迷惑をかけてしまう事があるかと思いますが、宜しくお願いします。

▼松宮 st と淳さん



初めまして。今年の四月に居宅介護事業のヘルパーとして採用して頂きました梅本 喜雄です。私は六十一歳の時、三十九年間勤務した住宅メーカーの会社を定年退職しました。それで、退職後の第二の人生は、是非とも福祉の分野で、社会貢献したいと思いました。その思いを実現する為には、専門性の高い知識や技術、倫理観、実践に通用する生活支援技術が必要であると考えて、二年間華頂社会福祉専門学校で学び、今年三月に介護福祉士の資格を取得しました。

現在、この居宅介護事業での支援対象者は、日毎に変化し、児童から成人までの幅広い年齢層です。それで、当初はそれぞれの個性の違による支援の仕方、マンツーマン対応、行動支援の俊敏生、送迎を含めた時間管理等、予想以上に心身共にハードな業務であると感じました。しかし、こうした厳しい内容であっても、充実した日々喜びを感じています。それは、例えば利用者さんの生活の一部支援であっても、心の通いを徐々に感じ、福祉の世界の幅の広さと、奥深さを感じずにはいられない毎日だからです。人生経験は長いのですが、この世界では未熟者ですので、先輩の皆様方のご指導のほど、宜しくお願い致します。



▲崇史さんと梅本 st

《織物》



《紙づくり》



《空き缶潰し》



落穂寮

日中活動紹介 2012

日課が始まりました!!
五月になり、それぞれの日課が始まりました。療育では新しい取り組みとして、ミニヒマワリを一人一鉢育て始めました。今では、双葉が出始めています。これから療育では、ハーブや花、野菜も育てる予定で、五感を通して楽しんで頂ける取り組みを進めて行こうと考えています。

また、療育の他にも外作業や織物でも五月からメンバーを変え、心機一転頑張っております。外作業では、今まで一つだったグループを二つに分け、それぞれのペースに合った取り組みを行い始めています。落穂坂の散ってしまった桜を箒で掃く人、集まった花びらをバケツに入れる人、それを運ぶ人など、それぞれの力を発揮されています。

織物でも新しいメンバーを迎え、糸や織機に工夫をこらしながら、平織り、むすび織り等、行っています。

ECO班でもメンバーが増え、パワーアップしました。作業に必要な缶が不足してしまうなど、皆さん力をしっかり発揮し、缶潰しにとり組んでおられます。スチール、アルミ問わず大募集しております。

紙作り班では、よりスムーズに取り組んで頂き、生産を上げる為に作業場を改築しました。これによって、一人で作業せざるを得なかった作業が二人で出来るようになりました。

今後、日課同士で協力し、作品展の開催もしていこうと考えています。活動内容に新しい風を吹かせ、利用者さんに充実した日々を過ごしていただける様、支援していこうと思います。

《環境整備》



《療育的活動》



女子棟トピックス



四月二十二日、天気はあいにくの雨模様。残念ながら今年のお花見遠足は中止となってしまいました。なのでお弁当は棟内で食べることに。せっかくのおいしいお弁当、満開の桜の下で食べたかったです。

代わりと言ってはなんですが、後日、女子棟の療育班の方達でプチお花見を行いました。桜はほとんど散ってしまっていました。みなさんニコニコ笑顔で楽しんでもらえました。

来年こそ晴れますように!

幻のお花見遠足

地域生活支援室の『今』

落穂寮の敷地の一角に一番新しい建物がありません。そこに地域生活支援室の拠点となる事務室があります。地域生活支援室は今年から二年前、平成二十二年に地域・在宅で暮らす方々を支援していくために、事業を立ち上げました。現在五名の専属スタッフと、三名の登録ヘルパーと寮の職員との応援を得て支援に当たっています。五十名近い方の契約・登録等を頂き、就学前の方から四十代の方までご利用頂いています。ご利用頂いている方の内の大多数が三雲養護学校に通っておられる方で、午後三時になると、支援棟（新しい建物）はにぎやかな声に包まれます。利用者の方々の元気な声と笑顔にスタッフ一同が活気づく時間です。

地域生活支援室を利用しておられる方々は、さまざまな事情を抱えながら日々、地域の中で暮らしておられますが、私達はそれぞれの方々の事



情に寄りそい、理解する事で、利用者の方々の役にたてればとの思いで支援に当たっております。

私達の地域生活支援室が利用者の方々にとって利用しやすい場であり、日常生活と変わらない家庭的な触れ合いの場を提供できればと日々思いめぐらせております。今後ともより多くの方々のご利用をお願いするとともに、より多くの方々のご協力を頂きたいと願っております。

今回は男子棟での余暇の時間での取り組みについて紹介させていただきます。内容としては、男子棟内で以前より取り組んでみたいという話で出ていた「ホールでコーヒーを楽しむ」というもので、つい先日実施しました。これは、今までの余暇時間ではDVDを鑑賞したり、音楽を聴くだけだったので、コーヒーの好きな利用者さんも多いことから、より有意義な時間を過ごすために、ということとで始めました。今までされてこなかった試みなので、皆さん驚きと喜びの混じった良い表情を見せて下さいました。

今後も余暇時間を利用して、利用者さんたちと楽しく過ごせるように様々な取り組みをしていこうと思えます。



〈コーヒーでホっこい〉



ほっこい～!!



もっと飲みたいなあ～!



うまい!! もう一杯!!

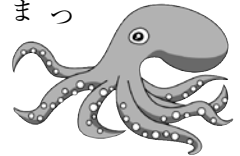
男子棟トピックス

祝 第 62 回 開 寮 記 念 日

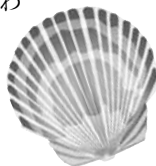


五月一日、氏神まつりも無事終了した後、今年も落穂寮の開寮記念日のお祝いを食堂で行いました。

今年で六十二回目の開寮日、つまり落穂寮は六十二歳になりました。前日の夜に職員が飾りつけた食堂のテーマは氏神まつりのおみこしにちなんで「海」。窓や天井では、お魚はもちろん、イカ、タコ、カイなど、海の生き物が皆さんを出迎え、お祝いムードを盛り上げてくれました。今年の食事はこれまた偶然なのか、海鮮



井と海つながり。どんぶりの上でも、マグロ、海老、イカ、イクラなどなど、とても賑やかでした。寮長のお話が終わるとみんなで「いただきます。」をして、おいしい海鮮丼やエビフライ、若竹煮をいただきました。さて、毎年、この開寮記念日に、男性職員で十年、女性職員で五年間勤続された方を表彰しているのですが、今年は何年かぶりに該当者がいませんでした。来年はこちらのお祝いもできるといいですね。



泉

新年度がスタートしました。新たな職員も加わり、落穂寮に関わる職員の数も、いつの間にか五十人程に。昔に比べるとかなりの大所帯となりました。「大男総身に知恵が回りかね」といったことにならないよう今まで以上に職員間のコミュニケーションを図り、支援の充実に努めて行きたいと思えます。さて、昨今、入所施設の方について様々な視点で論議が行われています。落穂寮としてもこのような時代の流れとは無関係ではいられません。これまでの入所事業も新たな視点での再構築を試みていくところです。今年度中に何らかの結論が出せるよう、日々精進していきたいと思います。

木 言 こと

風が種を運び
雲が雨を降らせ
太陽が熱と光を届ける
芽を出して
土の栄養を吸い上げる
無駄なものはない
私の周りも あなたの周りも